健康コラム

名医が語るお母さんへの手紙

いたちごっこの風しん対策

今年は関東地方を中心に風しんが流行し、東海地方にも広がってきています。2013・2014年の1万6000人を超える大流行後、最大の流行で感染者が増え続け、9月26日感染症研究所の発表では642人となりました。風しんは麻疹とは異なる感染症ですが、ママゴン2016年11月号「いたちごっこの麻疹対策」を覚えている読者もいるでしょう。今月は、風しんの問題について改めて考えてみましょう。

まずは風しんについて簡単に症状を説明しましょう。風しんウイルスが原因で、飛沫で感染し、潜伏期は2～3週間です。発熱、リンパ節腫脹、発疹が主症状で、発熱は半数程度で数日で下がります。発疹はピンク色でかゆみがあり、顔面から始まり体、手足へと広がり3日ほどで消えるため、三日はしかとも呼ばれます。成人が罹患した場合は、発熱や発疹の期間が子どもに比べて長く、症状が重くなる傾向があります。感染力が強いことに加えて、感染しているのに症状が出ない不顕性感染（15～30％）が多いことも特徴です。自分で感染に気づかないのですから、知らないうちに感染源となってしまうのです。

三日はしかと呼ばれるくらいに症状が軽いのですが、とても深刻な問題を抱えています。それが、先天性風疹症候群（CRS）です。妊娠初期の母体が風しんに罹患すると胎児も感染し、難聴、心疾患、白内障、そして精神や身体の発達遅滞等の障がいをもつ児が生まれる可能性があります。妊娠の時期によって頻度が変わりますが、妊娠12週までの罹患では発症の可能性が高くなる（25～90％）ことが示されています。前回の大流行時には45例が発症し、11人のお子さんが亡くなりました。症状は改善するものでは無く、さらには治療法もないため、親御さんもお子さんも大きな負担を背負うことになります。

CRSは本当に深刻な病気ですが、ワクチンで防げる病気であることを理解してください。子どもたちはMRワクチンの接種で（2回）ほぼ全員が免疫を持っています。前回流行時では罹患者の70％は男性で、うち20代～40代が80％を占め、今回の流行でも同様な状況です。30代後半から50代の男性の5人に1人、20代から30代前半の男性は10人に1人は免疫を持っていないとのデータがあります。この男性たちが感染源となっていることが問題なのです。

麻しんや風しんが流行するたびにマスコミが取り上げ、国や自治体、加えて専門家から様々な注意喚起や対策が呼びかけられます。自分も流行のたびに記事を書き、ワクチンの重要性を伝えます。同じような記事を繰り返し書かなければならないことは、小児科医としてはとても悔しいことです。原因は一体どこにあるのでしょうか。結局、すべては他人事という意識に起因し、自分には関係がない、私だけは大丈夫という誤った認識が、いたちごっこの元凶となっているのです。その意識が変わらない限り、今後も感染が続き、CRSも増え続けるのでしょう。

ここで改めて、悔しい思いを込めて繰り返し書きます。風しんとCRSの予防にはワクチンしかありません。しかしながら、未接種者や1回接種者が問題なのです。

❶ MRワクチン定期接種を早めに接種
❷ MRワクチン未接種者は、緊急に接種
❸ ワクチン1回接種者は、MRワクチン追加接種（2回接種）
❹ 30～50歳代男性も、社会を守るためにMRワクチン接種

まずは病気を理解することから始め、問題を自覚するために抗体価の検査を受けましょう。そして、家族や社会を守るという意識を持ち、成人男性が先頭に立ってワクチンを接種しましょう。

小児科専門医 川村 和久
仙台市在住。医療法人社団かわむらこどもクリニック（仙台市）院長。日本一の小児科サイトを運営。「お母さんの不安・心配の解消」を開業理念として、様々な子育て支援活動に取り組んでいる。仙台小児科医会長。宮城県小児科医会副会長。日本外来小児科学会理事。
http://www.kodomo-clinic.or.jp

かわむらこどもクリニック

◀ かわむらこどもクリニック フェイスブックページ

A「＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊」 ＊＊＊くん（＊歳）